

〈実践報告〉

東アジアプロジェクトについて

東アジアプロジェクト:

尾下裕司、志村理子、富永悠介、吉田藍、飯田美郷、渡辺美奈子

東アジアプロジェクトの発足

「アジア」であれ「東アジア」であれ、それを定義することはなかなか難しい。その捉えがたい「アジア」「東アジア」を、自他との対話や交流を通して考えようとしてきた。

まずは、日本植民地期と、その後の冷戦期において分断され、作られ、語られたそれぞれの地域の「記憶」や「経験」に耳を傾けることがある。例えば、元従軍慰安婦の方々の声に耳を傾けるとき、その声は、韓国や北朝鮮、台湾、中国、フィリピン、沖縄から聞こえてくる。しかし、そうした声を一方的に書き消そうとする今の日本政府の態度を「東アジア」という文脈で思考するとき、そこには何が浮かび上がってくるだろうか。どんな記憶や経験が「東アジア」で語られ、どんな記憶や経験は「東アジア」から消えていくのだろうか。そうした物語たちを相対的に突き合わせていくこと。それが、韓国、フィリピンで行ったツアーの目的の一つだった。また、「東アジア」におけるアメリカの存在を、とりわけ、米軍基地を巡る様々な言説を「東アジア」という枠組みで考えてみることもプロジェクトの目的としてあがっていた。

視点を台湾に戻せば、フィリピン、タイ、ベトナム、インドネシアなどから台湾にやってくる移住労働者たちが目に入ってくる。彼/彼女たちはどうして台湾へやってくるのか。資本主義、グローバルゼーション、移動、労働者。ここ台湾

は、こうした移住労働者たちにその労働の多くを頼っている。しかし、台湾政府や台湾に住む住民はこうした移住労働者たちのことをどれくらい知っているだろうか。欲しいのは労働力だけで、彼/彼女たち一人一人のことはどうでもいいのではないか、と思えてくる（例えば献血のできる「外国人」は誰なのか?）。私たちは台中駅近くのカソリック教会や工業区にあるタイ料理レストランに通い、今の私たちだからこそできることは何かを考えた。バザーをして、地図作りのための資金を貯めた。後はどんな地図が作れるのか、移住労働者たちの声に耳を傾けながら、作っていききたい。

以下、これまでの具体的な活動内容と今後の活動を紹介していきたい。

韓国・フィリピンツアー2007

東アジアプロジェクトとは直接関係ないのだが、大学院後期の授業に文化交流工作論というものがあった。その授業の一環で2007年4月6日から6日間<韓国ツアー>に行くことになる。目的は、韓国のミュージアムを巡るというものだった。戦争や民主化の記憶にまつわる記念館を中心に回った。その他に旧日本軍によって強制的に売春させられた元「従軍慰安婦」のおばあちゃんたちが共同生活する「ナヌムの家」や、仁川にあるマッカーサー像を訪れた。私たちが「東アジア」という視点で物事を考え始めるきっかけの一つになったツアーだった。そしてこ



◆ ◆ ◆ ◆ ◆

のプロジェクトの参加者の多くが行った〈フィリピンツアー〉は2007年8月15日から8月26日の11日間、台湾、日本の学生、前回の韓国ツアーで知り合った韓国の大学生、それから教員など計16名がフィリピンのマニラに集まり、フィリピンの学生や協力者と共に様々なことを学んだ。主に三つのグループに分かれ、テーマ毎にツアーで見たこと考えたことをみんなで毎晩検討し、最後の発表会に向け準備をしていった。一つ目は、台湾にも多く出稼ぎに来ている移住労働者について。フィリピンではOFW (Overseas Filipino Workers) と呼ばれている。OFWは歴史的な観点から見てどのように始まってきたのか、東アジアにおける彼らの存在とは…そしてフィリピンではどのような生活をしているのだろうか、といったことについて。事前に調べた台湾でのインタビューなどを下にマニラで出会った人にも話を聞いたりする。二つ目は、開発について。開発について考えていくうちに“教育”ということに結びついた。ここでいう教育とは学校で学ぶということだけではなく、貧困や生きにくい現状の連鎖から抜け出すために必要なこととは何か？ それほどのような教育なのか？ ということ。教育に関するNGOや政府機関を訪れ話を聞く。三つ目は過去の戦争、フィリピンの米軍基地の存在が東アジアにどのような影響を与えているのか。そしてフィリピンの元「従軍慰安婦」おばあちゃんたちが暮らす「リラ・フィリピーナ」にも訪れお話を聞かせてもらった。これらのツアーをとって、東アジアという視点・広い視点で物事を捉えるきっかけの一つともなったし、台湾・韓国・フィリピン・日本の若者のつながりが出来たという事でも大きな経験であった。

料理作りとバザー

台中駅の近くにあるカソリック教会。毎週日曜日、台中市や近隣の市や県から多くの移住労働者の彼/彼女たちが通ってくる。プロジェクトが正式発足する前、何か一緒にできないかということから、神父さんの住居兼みんなの憩いの場〈パストラルセンター〉におじゃまして料理を作ってみようということになった。第一回目はお好み焼きを作った。作ることに一生懸命になってしまい、結果、ただ食べてもらうだけになってしまった。というわけで二回目はメニューを野菜の肉巻きにして、一緒に巻きながらおしゃべり（ジェスチャーや知っている英単語を駆使して！）。その後も肉じゃがや散らし寿司、磯部焼きなども作った。一緒に食べた後（と言っても、ホスピタリティー精神からかいつも「お客さん」の私たちに先に食べさせてくれる）カラオケやおしゃべりがいつもの流れ。少しずつ私たちの名前を覚えてくれ、いつ伺っても笑顔で迎えてくれる。そしてクリスマス会やカウントダウンパーティー、誕生日会参加へと交流の場が広がっていった。

後期になり、お世話になっている方たちに関係することでプロジェクト活動資金（主に地図作り用）を集めることが出来ないかと考えた結果、ツアーで訪れたフィリピンで古着屋をよく見かけたということでバザーをすることにした。主にクラスメイトや学部生や先生方に状態が良いいろいろなものを提供していただき、移住労働者の中でも工場勤務の方のお給料日、毎月10日の後の金曜日や日曜日にパストラルセンターで2回、タイ料理屋の店先で2回開くことができた。私たちはほとんど用意することができなかったが、電化製品の要望が多かった。実際に並べた物の中では洋服以外に子供に

送るぬいぐるみなど人気があった。私たちは普段の生活をとても切り詰め、仕送りをしている彼/彼女たちを見てきた。決して多くない生活費から自分のもの以外に、自分の家族に送ってあげられるものを買っていく彼/彼女たちの存在がまた少し大きく見えたと同時に彼/彼女たちの家族を想像した。

このようにプロジェクト発足前のお料理交流を経て、発足後後期のバザーにつなげることが出来た。

地図作り

前述の〈フィリピンツアー2007〉でフィリピンに住んでいる人々やパストラルセンターでの料理作りで知り合ったフィリピンからの移住労働者たち、台湾のNGO組織で彼らを支援している人々、タイ料理屋で知り合ったタイからの移住労働者たち、他にも様々な人たちと遊んだり討論したりして、その活動の中から「彼らと一緒に何かできないか？何ができるか？」と考えながらプロジェクトを進めてきた。

そうした活動や関係の中から東アジアプロジェクト後期の具体的な活動として、台北にある移住労働者たちを支援するNGO組織TIWA(Taiwan International Working Association)で作られている移住労働者のための地図を参考に、台中でも移住労働者のための地図は作れないかと地図製作の提案が出され、東アジアプロジェクトのメンバーを主体に、学部の学生と共同制作することになった。

最初の試作として、対象を「台湾、台中に来たばかりの移住労働者」と設定し、移住労働者たちが多く働く工業区、その近くの東海大学付近、休日に移住労働者で賑わう台中駅前地区、多くの移住労働者が生活している潭子…等の地域に分割し、メンバーがそれぞれ実際にフィ

ールドワークを実施、街の人や商店、移住労働者にインタビューしながら、移住労働者が必要な情報は一体何か？何を書いたら便利だろうか？など、移住労働者の気持ちを〈想像〉しながら各地域の地図を作り上げていった。

そして各チームが地図を持ち寄った会議では、フィールドワークで実際に感じた問題点や意見を共有し、地図に書き込む言語(漢字はわかりにくいだろう)、道路名(表記が漢字な上、最初は参照しにくいだろう)、ランドマークとなるわかり易い記号(7-11、Family mart、大きな看板など)など、それらを書き込む意義を再討論し、地図をより現実的に使いやすいものにするための改正案が出された。更にこの地図を利用し、東アジアプロジェクトの最後の発表会で発表し、実際に移住労働者の方にも見てもらうことも決定した。

多くの方に参加してもらいたい、付近の住民も参加できるということで、発表会は大学外で行われた。その会場は、東海別荘地区から台湾全土に様々な人たちの声を発信している「和平珈琲店」。東アジアプロジェクトの成果報告、フィリピンからの移住労働者の方とメンバーと一緒に作ったケーキを食べながら地図製作の発表が行われた。

地図製作に関しては、出来上がった地図の展示、映像を見て白地図を辿ってもらう体験型ワークショップを実施した。参加者は少なかったのだが、実際に移住労働者の方に地図を見てもらい、意見をもらえる最初の機会だったので、反省を込めた有意義な会になった。

以上が大まかな地図製作の経緯だが、これらの活動を通しての気づき、今後の反省点を書きたい。

地図製作にあたり、台湾に来たばかりの移住労働者たちが、そこに書かれてい



る言語の問題に直面するだろうと焦点を絞り、地図を製作してきたように考える。しかし、実際に移住労働者の方に地図を見てもらい我々が製作していた地図の問題がわかった。それは「地図を読むリテラシー」は、学習やトレーニングによって身につく技術だということを見落としていた。私たちが一方的に「移住労働者たちのリテラシー」を想定・想像し、対象である移住労働者たちの意見を聞かずに地図を製作したことに問題があったのではないかと。確かに、対象を想定・想像して相手の立場を考えることも重要な事だ。しかし当事者の人たちと一緒に問題共有し、そこから何かを作り始める、そのことが更に重要な事だったのではないかと。

それは、最初に企画した平面的な地図、更には根本的な問題設定自体を考え直すということも含まれているだろう。この反省は、地図製作に限らず、東アジアプロジェクトの存在意義の再考察として今後の糧としたい。

今後の活動

私たち大学院2期生は半年間ほど1期生の活動に参加していた。1期生と一緒に活動しながら、台湾における移住労働者に関する様々なことを教えてもらった。そして、97年度に入り、2期生が中心となって活動していくことになった。中心メンバーは学生2人と教師1人と少数であり、しかも全員日本人である。私たちは今後プロジェクトでやっていきたいことを話し合い、多くの活動計画が考え出された。そこで、短期中期長期の3つに分けることで目標設定をうまく行うことが可能になると考えた。96年度の活動を引き継ぎながら、私たち2期生は「交流」をテーマに各活動を行う。ここでは、各活動目標を説明することで、私

たち東アジアプロジェクトの今後の展望についても述べていく。

(1)短期的活動目標

約半年間かけて地図作りを作成することが主な活動である。これは先輩たちからの活動を引き継いだ形となっているが、その目的については私たち2期生で改めて捉えなおした。私たちの地図作りの大きな目的は、外国人の姿が見える地図を作ることである。台湾には移住労働者として多くの外国人が生活している。しかし、身近にいるにも関わらず、立場や背景を超えた交流はあまり見られない。そればかりか、その存在についてあまり気づいていないように思われる。つまり、私たちには、台湾人にとって外国人、とくに移住労働者は不可視の存在であるように思えた。そこで私たちは彼らの営みが見える地図を作成することで、彼らの存在というものを示すことができるのではないかと考えた。そして、多くの人に台中にも彼らが行く店が多くある、すなわち、外国人が多く生活している、ということの気づきを促していこうと思った。そのような思いから私たちは、「外国人の営みが見えること」をモットーに「外国人が感じられる地図」を作成することにした。具体的には、台中駅周辺の移住労働者が休日に集う場所や料理店・雑貨店を地図にして紹介していく。

また、実際に地図作りを取り掛かったときに、様々なことを感じた。それは、私たち自身も外国人について知らない部分がある、ということである。活動する自分たちも彼らについて知っていかなければならない。そこで「外国籍・外国人」という言葉をキーワードに、台中並びに台湾についての情報を収集していく。それと同時に、移住労働者との交流も図っていく。

